●昭和の時代は、陸軍の謀略と共に始まった
▽まず 張作霖爆殺事件(昭和3年6月4日)
▽馬賊上がりの張作霖が 満州を支配したのは
関東軍をはじめ 日本の支援があったから
▽河本大作大佐(関東軍高級参謀)は 反日的態度に
危機感を募らせ 奉天(現瀋陽)で 列車を爆破
満州を 一挙に 武力占領しようとした

●「15年戦争」の出発点となった満州事変(昭和6年9月18日)

**奉天特務機関の第一報**

(19日午前1時7分・参謀本部着電) 十八日夜十時半頃奉天北方北大営西側ニ於テ暴戻ナル支那軍隊ハ満鉄線ヲ爆破シ我カ守備兵ヲ襲ヒ駆付ケタル我カ守備隊ノ一部ト衝突セリ 報告ニ依リ奉天独立守備隊第二大隊ハ現地ニ向ヒ出動中ナリ

▽新聞各紙は 19日朝刊トップで 伝えた
「奉天軍(張学良軍) 満鉄を爆破
日支両軍戦端を開く 我鉄道守備隊応戦す」
▽爆破現場は 奉天駅北方7キロの 柳条湖

**「柳条溝事件」**

現場は戦後も長く柳条溝とされてきた。関東軍が発表の際間違えたもので、昭和56年、中国研究者の論文で、柳条溝は近くの別の地名で、正しくは柳条湖であることが分かった。

▽陸軍当局の発表では「暴戻なる支那軍隊」
「暴支膺懲」の 国民の声に 押され
関東軍は 電光石火 4ヵ月半後には
全満州(日本本土の3倍半の面積)を 占領した
▽軍部も国民も 大成功に 酔った
「昭和大恐慌」の 真っ只中
国民には パッと 光が射したように見えた

●戦争は、愛国心を掻き立て、マスコミを活気づける
▽陸軍と新聞社幹部の 時局懇談会(7月16日)で
小磯国昭少将(軍務局長)は
「満州を独立させる必要がある」と 強調した

**張作霖**(ちょう・さくりん)
1875～1928 奉天軍閥首領。奉天省の貧農の家に生まれ、馬賊となる。日本の支援で大正5年奉天督軍兼省長。15年には北京に進出、政府を樹立したが、蒋介石軍に追われ奉天に引き揚げる途中爆死

**河本 大作**(こうもと・だいさく)
明治16(1883)～昭和30(1955)兵庫県生まれ。陸軍大佐。大正15年関東軍高級参謀となり、張作霖爆殺事件で停職、予備役。昭和7年満鉄理事、満州炭鉱理事長、山西産業社長。戦後、24年に中国共産軍に捕えられ、太原戦犯管理所で病死

**張学良**(ちょう・がくりょう)
1901～2001 張作霖の長男。父の爆死後満州の実権を掌握、昭和3年12月国民政府に忠誠を誓い、満州の保安総司令に。満州事変で追われ外遊。11年末、内戦停止と徹底抗日を要求して蒋介石を監禁(西安事件)、抗日民族統一戦線結成を促す。戦後、台湾で軟禁。平成2年に名誉回復

**仙台駅前の「多門通り」**

事変で先陣切って活躍したのが、多門二郎中将率いる第2師団(仙台)。郷土師団が凱旋した時、仙台市民は総出で手に手に日の丸の旗を振って出迎えた。戦後も凱旋道路として、大通りに栄光の象徴だった師団長の名前。

**多門 二郎**(たもん・じろう)
明治11(1878)～昭和9(1934) 静岡県生まれ。陸軍中将。参謀本部第4部長、陸大校長を歴任。満州事変では第2師団長

**小磯 国昭**(こいそ・くにあき)
明治13(1880)～昭和25(1950)栃木県生

▽緒方竹虎（東京朝日新聞編集局長）が
「時代錯誤も甚だしい。そんな荒療治は中国との全面衝突になるし、諸外国を敵にすることにもなる。もし、そんなことを企んでも、今の若い者は一人もついて行かないだろう」
▽小磯は「なあに、日本人は戦争が好きだから、一度鉄砲を撃ってしまったら、後は必ずついて来る」
▽満州事変は 小磯の読み通りに 展開した

**ＮＨＫの臨時ニュース第１号**

19日朝6時54分、放送中のラジオ体操を中断、事変勃発を速報した。大正14年7月に放送を始めてから、受信世帯は100万近く（昭和8年2月突破）になっており、その速報性、影響力は新聞社の大きな脅威となった。
新聞社の圧力で、通信社がニュース配信をストップしたため、ＮＨＫは放送記者を養成、自前のニュースを作製するようになった。

**ただ1紙、特落ちした都新聞**

満鉄爆破の第一報を最も早く発信したのは、都新聞（現東京中日新聞）契約の新聞聯合だったが、極度に興奮した軍当局の検閲に引っかかり東京着電は、2時間遅れて発信した日本電報通信に先を越されてしまった。聯合だけに頼っていた都新聞の特落ちとなり、部数が半減した。
なお、政府は情報一元化のため、昭和11年1月2大通信社を合併させ同盟通信社を設立した。

▽上越線が開通（昭和6年9月1日）し 東京の新聞は
新潟県進出に しのぎを削っていた
▽各社は 満州に続々と 特派員を送り込み
事変の速報に 力を入れた
朝・夕刊では間に合わず 第1・第2号外まで発行

●「新聞が戦争を煽った」
▽事変の速報のみに熱中し 軍発表を丸呑み
▽ただ 新聞も国民も
「日本の軍隊は正義の軍隊」と 信じ切っていて
満鉄爆破が
関東軍の謀略とは 思ってもいなかった

まれ。陸軍大将。昭和5年陸軍軍務局長。軍部の政治進出を推進し、次官、朝鮮軍司令官、拓務相を歴任し19年首相。A級戦犯で終身禁固刑を受け、拘置中病死

**緒方　竹虎**（おがた・たけとら）
明治21（1888）～昭和31（1956）山形県生まれ。朝日新聞に入社、大正14年37歳で東京本社編集局長。主筆、副社長として朝日の社論を引っ張る。昭和19年、小磯内閣国務相兼情報局総裁。敗戦後、東久邇内閣国務相。追放解除後、27年に衆院議員となり、吉田内閣官房長官・副総理格国務相。29年自由党総裁。保守合同後の自民党総裁と目されたが急逝した

**「読売新聞百年史」から**

当時部数22万部。関東中心のブロック紙で、夕刊を出していないため、部数は2千、3千と減っていった。正力松太郎社長は2晩寝ないで考え、編集局に社員を集めると、演壇代わりに、編集局長のデスクに靴のまま上がって夕刊発行の決断をぶった。
経営状態がまだ不安定な時。その夜遅く、政治部員11人が「自殺行為」と、夕刊を止めるよう正力に直訴したというが、部数は10万、20万単位で増えていった。今日1千万部を超える部数は、満州事変がスタートだった。

**正力　松太郎**（しょうりき・まつたろう）
明治18（1885）～昭和44（1969）富山県生まれ。大正13年警視庁警務部長在任中、虎ノ門事件（摂政宮狙撃事件）で引責辞任。読売新聞を買収して社長となり経営不振を克服。27年日本テレビ創立。鳩山内閣科学技術庁長官、原子力委員長など歴任

**東京朝日新聞社説**（9月20日付）
すでに報道にある如く、事件は極めて

●謀略計画を作成、実行した石原莞爾中佐（関東軍作戦主任参謀）

**張作霖爆殺事件後の満州情勢の激変**

蔣介石が中国統一のため、「北伐」（北方軍閥打倒）の軍事行動を起こしたのが大正15年7月。張作霖爆死から4日後の昭和3年6月8日に北京に入城し、「北伐」を完了させた。10月には南京に国民政府を樹立、蔣介石が主席に就任した。この時北京は北平（ペーピン）と改められた。

当時の田中義一首相は、軍事援助や経済援助を餌に、張学良抱き込みを図ったが、父親が関東軍によって殺されたことを知っている張学良は、乗ってこなかった。12月29日には国民政府に忠誠を誓い、満州に青天白日旗が翻った。

▽張学良は 国民政府から
　東三省（奉天、吉林、黒龍江省）保安総司令に
　　任命されると 民衆に 排日を呼びかけた
▽奉天など 街中の壁には 大きな文字で
　「旅順、大連を回収せよ」「満鉄を駆逐せよ」
▽反日・抗日運動は 満州でも 激化の一途を辿り
　23万近い在満邦人は 危機感を募らせた

**世界恐慌の波は満州にも押し寄せた**

満州特産の大豆をはじめ農産物価格が暴落、その荷動きが減れば、当然、満鉄の輸送収入にも影響が出てきた。昭和4年に2億4千万円あった収益が、5年には1億8千万円に激減した。3万4千人の社員を3万1千人余りに整理縮小、満鉄創業以来の経営危機に見舞われていた。

●田中内閣総辞職で、民政党・浜口雄幸内閣（昭和4年7月2日）
▽浜口が 右翼に狙撃され重傷（5年11月14日）
　臨時首相代理に 幣原喜重郎外相
▽衆議院本会議（6年1月23日）で 松岡洋右（政友会）は
　満蒙問題を取り上げ 幣原外交を攻撃した

**「満蒙は帝国の生命線」**（松岡演説）

満蒙問題は、私は是は帝国の存亡に係はる問題である。我が国民の、我が国民の生命線であると考へて居る（拍手）国防上にも亦経済的にも左様に考へて居るのであります。

簡単明瞭である。暴戻なる支那軍隊の一部が、満鉄線路のぶつ壊しをやつたから、日本軍が敢然として起ち、自衛権を発動させたといふまでである。その非と責任が支那側にあることは、少しも疑ふの余地が無い。

**石原　莞爾**（いしはら・かんじ）
明治22（1889）～昭和24（1949）山形県生まれ。陸軍中将。昭和3年関東軍参謀。満州事変を起こし、満州国建国を推進。10年参謀本部作戦課長、12年作戦部長。支那事変不拡大を主張したが容れられず同年9月関東軍参謀副長に転出。東条参謀長と対立、16年京都師団長で予備役。翌年立命館大教授となり民間で東亜連盟運動を指導。著に「世界最終戦論」

**蒋介石**（しょう・かいせき）
1887～1975 浙江省生まれ。保定保安学校を卒業後、日本に留学、振武学校に学ぶ。帰国して辛亥革命に参加し、大正15年国民革命軍総司令として「北伐」を開始。昭和3年北京に入城し国民政府主席に就任。11年張学良に監禁され（西安事件）、国共合作を受け入れる。支那事変勃発で対日戦を指導した。戦後、国共内戦を起こし、23年中華民国総統。24年内戦に敗れて台湾に逃れる。25年総統復帰

**田中　義一**（たなか・ぎいち）
元治1（1864）～昭和4（1929）長州萩生まれ。陸軍大将。大正4年参謀次長、シベリア出兵を推進。原・山本内閣陸相を経て14年政友会総裁となり、昭和2年首相に就任。3次にわたる山東省出兵を強行した。張作霖爆殺事件の処理で、天皇から叱責され総辞職。3ヵ月後に急死した

**浜口　雄幸**（はまぐち・おさち）
明治3（1870）～昭和6（1931）高知県生ま

…現内閣成立以来茲に一年半、此間現内閣は満蒙で何を為さったか…此満蒙の地に於ても亦幣原外相の絶対無為傍観主義が遺憾なく徹底されてあるやうに見えるのである（拙手）

＊満蒙とは　満州（東三省）と内蒙古（熱河・チャハル・綏遠省）

**「満蒙生命線論」は流行語に**

「咽喉は身体の生命線　咳や痰には竜角散」こんな広告の殺し文句にも使われた。満州には、日露戦争で10万の尊い血を流し20億円という莫大な国費を費やした ― しかも明治天皇のご偉業だ、という日本人共通の思い入れ。

▽「守れ満蒙」が　多くの日本人の　国民感情に
　満州事変が勃発した時
　これを支持する　国民的土壌が　作られていった

●満州事変は、「陸軍挙げてのクーデター」だった
▽陸大出の　陸軍省・参謀本部の　課長クラスが
　横断的に結束し　石原中佐を助けた

**満州事変の時、「一夕会」（いっせきかい）会員は**

陸軍省＝永田鉄山（軍事課長）岡村寧次（補任課長）松村正員（徴募課長）飯田貞固（馬政課長）鈴木貞一（支那班長）
参謀本部＝東条英機（動員課長）渡久雄（欧米課長）草場辰巳（運輸課長）根本博（支那班長）武藤章（兵站班長）牟田口廉也（庶務班長）　顧問・建川美次（作戦部長）
関東軍＝板垣征四郎（高級参謀）石原莞爾（作戦主任参謀）土肥原賢二（奉天特務機関長）

**「バーデン・バーデンの密約」から**

大正10年10月27日、南独の温泉保養地バーデン・バーデンに陸士16期の「三羽烏」永田、岡村ら3人が集まった。第1次大戦後の欧州を見て、総力戦に勝ち抜くには、陸軍改革、人事刷新、ことに長州閥打破を申し合わせた。1期下の東条も加わり、帰国して「二葉会」を結成すると、陸大から徹底して長州出身者を締め出した。

昭和4年5月19日、「木曜会」と合流し「一夕会」に。エリート中のエリート40人余りが参加。



れ。逓信次官、蔵相、内相を歴任し昭和2年民政党結成と共に初代総裁。4年首相に就任、5年1月金解禁を断行し、昭和大恐慌を招く。4月にロンドン海軍軍縮条約に調印。「統帥権干犯」の攻撃を受け、11月右翼に狙撃され重傷。翌年総辞職

**幣原　喜重郎**（しではら・きじゅうろう）
明治5（1872）～昭和26（1951）　大阪生まれ。駐英・駐米大使を経てワシントン会議全権。大正13年以来、加藤（高明）・若槻・浜口内閣外相。国際協調・平和外交を展開し、ロンドン条約を成立させた。戦後昭和20年10月首相。進歩党総裁となり、24年衆院議長。著に「外交五十年」

**松岡　洋右**（まつおか・ようすけ）
明治13（1880）～昭和21（1946）山口県生まれ。廻船問屋の実家が倒産、13歳で渡米、苦学してオレゴン大学を卒業。外交官となり、大正10年駐華総領事で退官。満鉄理事、副総裁を経て昭和5年政友会から衆院議員に当選。8年国際連盟総会で、満州国否認決議に抗議して退場し、国民的英雄に。15年近衛内閣外相。日独伊三国同盟を締結、日ソ中立条約調印。A級戦犯で起訴されたが、結核で死去

**永田　鉄山**（ながた・てつざん）
明治17（1884）～昭和10（1935）長野県生まれ。陸軍少将。大正10年スイス公使館付武官。陸大教官を経て陸軍省動員・軍事課長。昭和9年軍務局長。 統制派の中心と目され皇道派相沢三郎中佐に殺害される。二・二六事件の引き金に（死後中将）

**岡村　寧次**（おかむら・やすじ）
明治17（1884）～昭和41（1966）東京生まれ。陸軍大将。 陸軍省補任課長、関東軍参謀副長、参謀本部部長歴任。昭和13年11軍司令官、19年支那派遣軍総司令官

▽第1回会合で「満蒙問題は武力解決しかない」
満州事変のレールは この時に敷かれた

**「満州国建国」のスローガンも**

ドイツでは、ナチスがヒットラーの活発な宣伝活動で政界に躍り出そうとしている時だった。昭和3年8月27日にはパリで「侵略的戦争はしない」と誓った「不戦条約」が結ばれ、日本も調印していた。陸軍の満蒙方針を示すモットーが必要だとして、「五族協和」(大和、漢、満州、蒙古、朝鮮)、「王道楽土」も、「一夕会」の話し合いから。

▽関東軍人事も 満蒙武力解決の目的に 向かって
▽「知謀の石原・実行の板垣」の 満州事変コンビ
作戦主任参謀 石原中佐(3年10月10日)
高級参謀に 板垣大佐(4年5月14日)
河本の「自分の志を継ぐ者」の 強い希望で

●張作霖爆殺事件から、二つのことを学んでいた
▽「第二の張作霖事件にするな」
謀略が 謀略に終わっては 何にもならない
謀略→即戦闘開始→兵力増援を求め 戦火拡大
▽失敗しても 予備役編入の 行政処分どまり
軍法会議には かけられない 甘えの教訓

**河本を軍法会議にかけていたら…**

田中義一首相は、元老西園寺公望に強く勧められ、昭和天皇に関係者の厳罰を約束したが、「二葉会」は会員である「河本を守れ」と軍法会議に強硬に反対、陸相や上層部を突き上げた。首相には軍人の処分権はなく、田中は、天皇から叱責され、内閣総辞職に追い込まれた。

河本を軍法会議にかけ、厳正に処罰していたら、満州事変は起こらなかったろう。また陸軍下剋上の風潮にも、歯止めがかかったろう。

●謀略計画は、石原の緻密な頭脳から綿密に
▽関東軍兵力は 第2師団が中核
平時編成 仙台に留守部隊を残し 1万1千人
満鉄警備が 主な任務で 飛行機も 大砲もない
▽対する張学良軍は 不正規軍も含め 33万人



**東条 英機**(とうじょう・ひでき)
明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官、航空総監歴任。昭和15年近衛内閣陸相となり中国撤兵に反対。16年10月陸相兼任のまま首相。19年2月参謀総長も兼務したが7月サイパン陥落で総辞職。戦後、拳銃自殺を図ったが未遂。A級戦犯として絞首刑に

**板垣 征四郎**(いたがき・せいしろう)
明治18(1885)～昭和23(1948)岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年5月関東軍高級参謀。満州国軍政部最高顧問、関東軍参謀長、第5師団長。13年近衛内閣陸相。支那派遣軍総参謀長、朝鮮軍司令官、20年第7方面軍司令官。A級戦犯で刑死

**土肥原 賢二**(どいはら・けんじ)
明治16(1883)～昭和23(1948)岡山県生まれ。陸軍大将。関東軍参謀、昭和3年張作霖顧問。6年奉天特務機関長となり関東軍の政治・謀略部門担当。教育総監、第12方面軍司令官。A級戦犯で刑死

**建川 美次**(たてかわ・よしつぐ)
明治13(1880)～昭和20(1945)新潟県生まれ。陸軍中将。日露戦争で騎兵斥候の建川挺身隊を率いて「敵中横断三百里」(山中峯太郎作)のモデルに。昭和6年参謀本部第2(情報)部長を経て第1(作戦)部長となり満州事変を指導。第10・第4師団長。15年駐ソ大使。19年大政翼賛会総務

**西園寺 公望**(さいおんじ・きんもち)
嘉永2(1849)～昭和15(1940)京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相の時、陸軍の2個師団増設要求を拒否、陸相辞職で総辞職。パリ講和会議全権を務め国際協調に努める。山県死後、最後の元老として後継首相を奏請

▽まず 実施したのが 北満州参謀旅行(4年7月3日~15日)

**「満蒙領有計画」を初めて明らかに**

参謀に列車内の討議資料として「国運転回ノ根本国策タル満蒙問題解決案」を配布した。

「満蒙問題解決は日本の活きる唯一の途である。満蒙問題解決の鍵は日本軍が握っており、日本が同地方を領有することによって始めて満蒙問題は解決される」

●昭和6年に入ると、石原構想は具体化していった

▽内閣は 民政党・第2次若槻礼次郎内閣(4月14日成立)

▽武力行使を どうやって 正当化させるか

**「満蒙問題私見」(6年5月)**

武力行使につき「国家の状況之を望み難き場合も、若し軍部にして団結し、戦争計画の大綱を樹て得に於ては、謀略により機会を作製し、軍部主動となり国家を強引することは必ずしも困難にあらず」との結論に達した。

▽謀略の基本構想は 5月3日に 固まった

板垣の官舎(旅順)に 石原 花谷正少佐(奉天特務機関)

今田新太郎大尉(張学良軍事顧問補佐官)の 4人が集まった

▽満州浪人を集めて 中国人に変装させ

奉天総領事館 大和ホテルを 襲撃させる

これを口実に 関東軍を 満州各地に出兵させる

▽石原は 世論工作に 花谷少佐を上京させた

参謀本部の 橋本欣五郎中佐(ロシア班長)

根本博中佐(支那班長)は 全面協力を約束

工作資金(5万円)も「責任をもって工面する」

▽花谷が「世論工作はどうする?」

橋本は「国内でもクーデターを起こすさ」

**橋本は「三月事件」首謀者**

トルコ駐在武官時代、帝政トルコを倒したケマル・パシャに感化を受け、国家改造には議会を倒して独裁にすることだと、帰国すると5年9月に中佐以下の将校100人余りで「桜会」を結成。6年3月、宇垣一成陸相を首班とするクーデターを計画したが、直前に宇垣が中止命令。

**若槻 礼次郎**(わかつき・れいじろう)

慶応2(1866)~昭和24(1949) 島根県生まれ。大蔵省に入り桂・大隈内閣蔵相を歴任。大正13年加藤(高明)内閣内相。普通選挙法、治安維持法を制定。15年加藤死去で首相となるも、昭和2年の金融恐慌で総辞職。昭和5年浜口内閣のもとロンドン会議首席全権として海軍軍縮条約を締結。狙撃された浜口の病状悪化で、再び首相に就任したが満州事変勃発で8ヵ月で辞職。戦争末期には重臣として和平に尽力した。著に「古風庵回顧録」

**花谷 正**(はなや・ただし)

明治27(1894)~昭和43(1968)岡山県生まれ。陸軍中将。関東軍参謀を経て昭和5年奉天特務機関員となり、満州事変の謀略を担当した。満州国軍顧問、第55師団長、第18方面軍参謀長など歴任

**大砲も内地から**

満州視察に来た永田(軍事課長)に、石原が頼んで24㌢榴弾砲2門を送らせた。怪しまれないように神戸からわざわざ客船で運び、大連港の陸揚げも、関東軍の運搬要員は全員支那服の人夫姿。砲身は箱の中に入れて「葬式の棺だ」と、中国人の目をごまかした。

7月25日には、張学良軍1万人が駐屯する奉天城内の北大営に向けて、2門の砲列が敷かれていた。

**橋本 欣五郎**(はしもと・きんごろう)

明治23(1890)~昭和32(1957)岡山県生まれ。陸軍大佐。昭和2年から3年間トルコ駐在武官。5年参謀本部ロシア班長となり、満蒙問題解決、国家改造を目指す「桜会」を結成。三月事件、十月事件首謀者。17年衆院議員。A級戦犯で終身禁固刑を受けたが、30年仮出所

▽こうして「10月頃、満州と国内同時にやろう」

●時代は「激動の昭和」を迎え、指導力のある強力な首相、内閣を必要としていた

▽「浜口が健在だっらなあ…」

▽満州事変を 食い止めるチャンスは あったし
若槻首相が 毅然とした姿勢を 見せていたら
拡大の芽だけは 摘むことが 出来た

▽浜口は ロンドン条約締結(昭和5年4月22日)に
「統帥権干犯」の攻撃にも 不退転の決意で

▽若槻は「頭脳明晰、優秀な大蔵官僚」
決して 無理をしない 押しのきかない人だった

▽首相の性格を そのまま反映した 若槻内閣は
陸軍の謀略のままに 翻弄されてしまう

●若槻は、陸軍との対決を迫られる問題に直面

▽南次郎陸相は 軍司令官・師団長会議(6年8月4日)で
「門外無責任な者が、軍縮を唱えている」
民政党内閣の 軍縮政策を 非難した上で
満蒙問題が 重大な局面になっているとして
「職を軍務に奉ずる者は、
熱誠を尽くして、その本分を全うすべし」

▽大臣訓示は 異例なことに 新聞発表された

▽東京朝日新聞は 社説で
「満蒙問題を軍人の考え通りに引きずって行こうとするもので、陸軍大臣の政治演説は越権」

▽尾崎行雄代議士も 議会で
「軍人の政治関与であり、陸軍刑法に違反する」

**陸軍刑法**

第103条 政治ニ関シ上書、建白其ノ他請願ヲ為シ又ハ演説若ハ文書ヲ以テ意見ヲ公ニシタル者ハ三年以下ノ禁固ニ処ス

▽陸軍は「大臣所信」を発表 高姿勢で反撃した
「攻撃されるべきは、陸軍が満蒙問題を論議したことではなく、現内閣の中国政策こそ攻撃されるべきだ」政党内閣に対する挑戦 政府批判

▽その上「軍人が政治論を発表しても、
軍人精神を害なうような政治論でなければ、
軍律には触れない」と 開き直った

**根本 博**(ねもと・ひろし)

明治24(1891)～昭和41(1966)福島県生まれ。陸軍中将。昭和4年参謀本部支那班長。9年陸軍省新聞班長。第24師団長、駐蒙軍司令官を歴任。敗戦後、国民政府顧問として対中共内戦に協力した

**宇垣 一成**(うがき・かずしげ)

明治1(1868)～昭和31(1956) 岡山県生まれ。陸軍大将。5代の内閣で陸相。宇垣軍縮を実施。朝鮮総督を経て昭和12年1月組閣の大命を受けたが陸軍の反対で断念。13年近衛内閣外相。28年参院議員

**東京朝日新聞の若槻評**

昭和6年4月13日夕刊 …若槻礼次郎君は「善処」と「考慮」の合の子みたいな人だ、いつも政界の波が自然に彼を持ちあげて、若槻さんは爪をかみつゝ「深甚なる考慮」をして、その波の上にひょっこり「善処」してしまふ、自ら波乱を巻き起しそれを乗り切る風雲児でなくて、波のまにまに漂ひながらぬれ手で幸運の機会をつかむ人だといふやうな気がする。

**南 次郎**(みなみ・じろう)

明治7(1874)～昭和30(1955) 大分県生まれ。陸軍大将。支那駐屯軍司令官、参謀次長、昭和6年若槻内閣陸相。9年関東軍司令官となり、11年朝鮮総督。枢密顧問官、大日本政治会総裁歴任。A級戦犯で終身禁固刑。29年病気で仮出所

**尾崎 行雄**(おざき・ゆきお)

安政5(1858)～昭和29(1854) 神奈川県生まれ。号は咢堂。第1回総選挙以来、連続当選25回。文相、東京市長を歴任、「大正政変」で護憲運動の先頭に立つ。昭和27年代議士生活63年で、国会から「名誉議員」の称号。没後、「尾崎記念館」設立

▽陸軍省は「あらゆる機会を捉えて
　陸軍の主張を国民にアピールせよ」と 指令
▽各地の部隊 在郷軍人会が 一斉に
　演説会を開き 満蒙危機を訴え 気勢を挙げた
▽若槻首相は 南陸相を 究明すべきだったのに
　陸相辞職→内閣崩壊を恐れ 沈黙を続けた
▽幣原外相には 若槻が「何も言ってくれるな」
▽尾崎が 余りの腑甲斐なさに 呆れて
　「若槻は匹夫にして、宰相の地位を汚すものだ」

●軍司令官・師団長会議では、二つの重要な会合
▽陸軍首脳が 関東軍司令官本庄繁中将(8月1日付)を
　新橋の料亭に招き 満州問題について
　陸軍中央の 解決方策(6月19日案)を 伝えた
▽1年間の準備期間を 置いていたとはいえ
　陸軍中央も いずれは 武力解決を考えていた
▽本庄は 着任挨拶で「本職深ク期スル処アリ」
▽板垣大佐は 神田正種中佐(朝鮮軍参謀)から
　「朝鮮軍増援出兵」の密約を 取り付けた

●満州事変の導火線になった「中村大尉事件」
▽この事件に 石原中佐は 飛び付いた
　事件が公表されれば 世論は 沸騰するだろう
　満鉄を爆破し 張学良軍の仕業だとすれば
　　国民は 挙って 関東軍を 応援するだろう
▽決行日を 9月27日と決め
　満州浪人は外し 関東軍の ごく限られた者で
▽陸軍省は 8月17日 事件を公表した
　新聞は「残虐中国軍」「支那側暴虐の罪を糾せ」
▽陸軍も 全組織を挙げて
　「満蒙の危機」を叫び 戦争熱を煽り立てた
▽大阪では「満州で戦争になりそうだ」満鉄株暴落

●内大臣牧野伸顕は、陸軍の動きを心配した
▽西園寺を訪ね「秋の陸軍大演習の時、
　天皇から陸軍軍の軍紀について
　陸軍大臣に注意してもらったらどうか」
▽西園寺も 陸軍を抑えられるのは 天皇だけと
　「秋まで待ってたまるもんか。要するに非常に
　　急ぐから、すぐ陸海軍大臣を召されるように」

**本庄　繁**(ほんじょう・しげる)
明治9(1876)～昭和20(1945) 兵庫県生まれ。陸軍大将。参謀本部課長を経て大正10年から3年間張作霖軍事顧問。昭和6年第10師団長(姫路)から関東軍司令官。8年侍従武官長。戦後自決。「本庄日記」

**「満州問題解決方策大綱」**

一、満州の張政権の排日方針緩和については、外務当局と緊密に連絡して実現に努め、関東軍の行動を慎重ならしむること

二、この努力にかかわらず排日行動が発展するようであれば、軍事行動が必要になることを予期しなければならないこと

三、満州問題の解決には内外の理解が必要であるから、陸軍大臣が閣議を通し、現地の状況を各大臣に知悉せしむること

四、また関係列国にも排日行動の実情を承知させ、軍事行動を必要とする事態になった場合、日本の決意を了承して不当な圧迫に出ないように事前工作を行うこと

五、内外の理解を求めるための施策は、約一年かけ周到に実施すること

六、関東軍の首脳部に中央の方針を熟知させ、来る一年間は隠忍の上、排日行動から生ずる紛争を避け、万一、紛争が生じた場合も拡大せぬよう局部的に処理すること

**「中村大尉事件」**

将来の満蒙作戦に備えて、参謀本部から北満州調査を命じられた中村震太郎大尉(新潟県出身、34歳)が、興安嶺方面に向かったまま6月中旬消息を断った。中村は農業技師と偽り潜入したが、ピストル、測量機械、地図を持っていたため、屯墾軍(普段は開墾に当たっている中国不正規軍)にスパイと怪

▽天皇のご下問は 巧みに かわされ
　西園寺は 南陸相を呼び 厳しく 注意した
▽張学良側も 殺害に 責任があったことを認め
　現地に 調査隊を 出すことになったが…

●9月14日、林久治郎奉天総領事から外務省に急電
▽「軍が奉天で陰謀を企てている」
　軍隊を集結させ 弾薬資材を運び出す
▽南も驚いて 関東軍司令官に 自重を求める手紙
　使者は 小磯の推薦で 建川作戦部長に

**泥棒が泥棒を捕まえに行くようなもの**

陸軍首脳で、石原の謀略計画を知っていたのは小磯と建川だけ。根本博中佐が「本当に止めに行くのか」 建川は「俺の顔を見い」
飛行機も使えたのに、列車と関釜連絡船を乗り継いで、ゆっくり奉天へ向かった。

▽橋本中佐からは 同夜 板垣に
　「計画がばれた。早くやれ」の 暗号電報
▽延期するか 時期を早め 決行するか
　深夜になっても 決まらず
　　板垣が「クジで決めよう」
▽立てた鉛筆が 右に倒れ 一旦は 中止に

●9日早めて、18日夜決行に
▽秘密保持に 味方も欺く 石原一流の策か
　15日朝 ごく少数の 同志を呼び
　「決行できる最も早い時期」として 18日に
▽「止め男」建川は 18日午後1時 奉天に到着
▽出迎えた 板垣 花谷が
　「お疲れでしょうから用件は明日伺いましょう」
　　料亭「菊文」に 連れ込み「まず一献」
▽正式に 中止命令を 切り出す前に
　盛り潰す必要 建川にも 盛り潰される必要
▽建川が そのまま寝込んだ 夜9時過ぎ
　川島正大尉（独立守備隊第2大隊第3中隊長）の 1個中隊が
　　打ち合わせ通り 夜間演習に出動
▽河本末守中尉は 部下6人を連れ
　斥候に出て 午後10時20分頃
　　柳条湖付近で 満鉄線路を 爆破した

しまれ、27日同行の3人と射殺された。
関東軍は、屯墾軍隊長の愛人が日本人女性だったことから、7月下旬その通報で事実を知った。しかし、日本の抗議に張学良側は「例によって日本の難癖だろう」と、認めようとしなかった。

**牧野　伸顕**（まきの・のぶあき）
文久1（1861）～昭和24（1949） 鹿児島生まれ。「維新の三傑」大久保利通の次男。外務省に入り駐伊・駐墺公使、文相など歴任。大正2年外相。10年宮内相。14年内大臣となり政党・官僚・軍部の対立を調整した。吉田茂は女婿。著に「回顧録」

**西園寺、南陸相を叱る**

天皇は那須の静養先から戻られ、陸海相を召されたが、海相が9月9日、南は11日と後に。南は、ご下問の様子を聞いて天皇の先手を打ち、「若い将校の団結は軍紀上好ましくありませんから、厳重に取り締まります。外交についても軍部がかれこれ容喙したりすることは慎むべきであります」
西園寺は直接南を呼んで「満蒙の土地と雖も、支那の領土である以上、事外交に関しては全て外務大臣に一任すべきであって、軍部が先走ってとやかく言うことは、甚だけしからん。閣下の如きは輔弼の責任上、また軍の首長として十分な態度をもって、これを取り締まるべきである」
南も神妙に「十分注意致します」。西園寺は「只今、甘酒を飲んで参りましたといった感じでペラペラ喋っていたが、頼りないことおびただしい」

**林　久治郎**（はやし・きゅうじろう）
明治15（1882）～昭和39（1964）栃木県生まれ。天津・済南・漢口領事などを経て、昭和3年奉天総領事。7年ブラジル大使

▽河本が 爆薬装填から爆破まで 一人でやった
中国兵が出撃してくると 部下はみんな
「中国兵の仕業だ」と 信じていたという
▽伝令から「鉄道爆破され、敵襲を受く」
島本正一大隊長は 24㌢榴弾砲の砲撃を命じ
午前6時半には 北大営を 占領した

●爆破といっても、子供だましみたいなものだった
▽線路の片側だけ1本 1㍍ほど 吹き飛んだが
下り坂だったため 直後に 奉天行き列車が
何の異常も 感じないまま 通過している
▽国際連盟リットン調査団は 現地調査して
「この程度の被害で軍事行動に出るのは、
自衛とは認められない」 日本の「自衛」を否定
▽建川「子供の使いになってしまったよ」と帰京

●9月19日の朝、日本では…
▽幣原外相は 朝食の卓上で 新聞を広げると
目に入ったのが「日支両軍衝突」の記事
▽若槻首相も 同じ頃 南陸相の電話で
▽南陸相は 午前2時過ぎ
奉天特務機関の電報で 叩き起こされたが
まず 陸軍の体制を固めてと 夜が明けて報告
▽原田熊雄(西園寺の秘書役)は 号外で知って
「自分は直覚的に、いよいよやったな、と思った」

●関東軍の行動は、石原の計画通り迅速果敢だった
▽本庄軍司令官には 夜11時過ぎ 板垣から報告
石原が飛んで来て 第2師団司令部(瀋陽)と
歩兵第16連隊の 奉天進出を 意見具申
▽本庄は 19日午前零時 全関東軍の即時出動
奉天攻撃と 朝鮮軍に増援要請を 命令した

●陸軍首脳会議は、午前7時から開かれた
▽小磯がまず「関東軍今次の行動は、ことごとく
その任務に鑑み、機宜に適したものである」

**関東軍司令部条令第3条**(大正8年4月11日)
軍司令官ハ関東州ノ防備及鉄道線路保護ヲ行フ為必要ト認ムルトキハ兵力ヲ使用スルコトヲ得

**国際連盟リットン調査団**
リットン(Lytton、英国)調査団は昭和7年2月29日来日、報告書は10月2日に公開された。
満州の日本の権益を認めるなど、極めて冷静な立場に立つものだったが①日本軍の軍事行動は正当な自衛手段とは認められない②現在の政権(満州国のこと)は純粋かつ自発的な独立運動により出現したものとは考えられない — など、基調としては、関東軍の行動と日本の満州政策を否定するものだったため、軍部の受け入れるところではなく、日本は8年3月27日、国際連盟を脱退した。

**川島大尉は述懐している**
「列車が転覆して乗客に死傷者が出ていたら、鉄道警備が本来の任務だから、北大営突撃どころではなかった」
爆薬の量は、予め少なめにしていたのでは…。石原中佐とすれば「張学良軍の仕業」と、名目さえつけば良かった。

**原田　熊雄**(はらだ・くまお)
明治21(1888)～昭和21(1946)東京生まれ。日銀勤務、加藤(高明)首相秘書官を経て、大正15年元老西園寺の秘書となり、重臣・高官との連絡、政界情報の収集に当たった。著に「西園寺公と政局」

**新聞記者の「夜討ち朝駆け」**
朝日の高宮太平記者が午前5時頃、小磯軍務局長に朝駆けをかけると、小磯は陸軍省に出ようとしているところ。事件の真偽、見通しを尋ねてもなかなか口を開かない。長靴をはき、夫人から軍刀を受け取り、やっと「事件は大きくなるだろう」「大きくなるって、日清戦争になるんですか」初めて微笑を浮かべ、「日清戦争か、まあ、

▽軍事行動は 異議なく 陸軍中央で承認された
▽朝鮮軍から 兵力増援を決定 閣議提出の準備に

●緊急臨時閣議は、午前10時から開かれた
▽若槻首相が「関東軍の行動は、支那軍の暴戻に
対する自衛行動と信じて宜しいな」
念を押すと 南陸相は「もとより然り」

**林奉天総領事の外相宛て至急電**

「今次ノ事件ハ全ク軍部ノ計画的行動ニ出テタルモノト想像セラル」

▽幣原外相から 厳しく 追及され
南は 陸軍省に戻り
「これ以上拡大させない見込み」の 説明書
▽幣原は「見込みじゃダメだ。国際関係からも
あくまで小範囲に限定すべきだ」と 譲らず
結局 南が「保証する」と 書き直した
▽若槻内閣は「不拡大方針」を 閣議決定した
▽南は 朝鮮軍増援を 提案するどころでなかった

●幣原は「これくらいのことで驚くようでは、外交はやれんよ」— 軍部に次々と裏切られることに
▽金谷範三参謀総長は「不拡大方針」を受け
午後2時 関東軍に
「必要の度を越えないよう」打電したが
関東軍の方は 第1項で 挙兵承認と解釈
士気 大いに 挙がったという
▽三宅坂(陸軍省、参謀本部のある所)も 興奮と熱気で 騒然
期待に 胸膨らませた軍人が 走り回っていた

●19日夜、奉天で石原が「俺はもう作戦主任はやめた」
▽朝鮮軍の飛行機は 奉天へ やって来たが
肝心の第39旅団が 新義州(満鮮国境)で 足止め
▽神田(朝鮮軍参謀)は 事変勃発前の16日には
第39旅団(平壌駐屯)を「演習名目」で 出していたが
参謀総長から「国外出動は別命あるまで待て」
▽朝鮮軍が 国外である 満州に出るには
奉勅命令と 経費支出の閣議承認が 必要だった
▽石原の計画では 朝鮮軍到着を待って
第2師団を北上させ 吉林占領の予定だった

そんなことになるかも知れないね」と、そそくさと出て行った。

**高宮　太平**(たかみや・たへい)
明治30(1897)～昭和36(1961)福岡生まれ。読売、朝日で軍事記者として活躍。京城日報社長。著に「昭和の将帥」「順逆の昭和史」「米内光政」「人間緒方竹虎」

**金谷　範三**(かなや・はんぞう)
明治6(1873)～昭和8(1933)大分県生まれ。陸軍大将。参謀次長、昭和2朝鮮軍司令官。5年参謀総長。6年軍事参議官

**金谷総長の関東軍宛て電報**

一、九月十八日夜以後ニ於ケル関東軍司令官ノ決心及処理ハ機宜ニ適シタルモノニシテ帝国軍隊ノ威重ヲ加ヘタルモノト信シアリ
二、事件発生以後ノ支那側態度ニ鑑ミ事件処理ニ関シテハ必要ノ度ヲ越エサルコトニ閣議ノ決定モアリ　従テ向後　軍ノ行動ハ此主旨ニ則リ善処セラルヘシ

**関東軍は高姿勢だった**

事変発生の夜、林は不在で森島守人(総領事代理)が奉天特務機関に駆け付け、外交交渉による平和的解決を申し入れると、板垣大佐は「統帥権の発動を見たのに、総領事館は統帥権に容喙、干渉せんとするのか」花谷少佐は軍刀を抜いて、「統帥権に容喙する者は容赦しない」と威嚇した。
林は「勝ち誇れる暴君の威を揮い、止まる所を知らざる如く」と電報。

**森島　守人**(もりしま・もりと)
明治29(1896)～昭和50(1975)石川県生まれ。昭和3年から10年まで奉天総領事代理、ハルビン総領事。ニューヨーク総

▽「このままでは張作霖事件の二の舞だ」
関東軍 朝鮮軍 参謀本部の間で
「出せ」「出してもいいか」「待て」の 機密電報

●若槻首相は、弱り切っていた
▽原田熊雄が 電話で 首相官邸に駆け付けると
「困った、困った」「どうしたらいいか」
愚痴と 他力本願の 泣き言ばかり
▽余りの腑甲斐なさに 驚いた原田は
鈴木貫太郎(侍従長) 木戸幸一(内大臣秘書官長)に
集まってもらい 相談した
▽結論は「まず若槻が頑張ること」
木戸の「連日閣議を開いて、閣議で事毎に
陸軍を抑え、国論統一に努める」に 全員が賛成
▽緊急臨時閣議は 21日も開かれ
南陸相は「居留民保護」を名目に
朝鮮軍の満州派遣に 承認を求めた
▽幣原外相はもちろん 海相まで反対
結論は「明日の閣議で」と なったが
若槻は すでに 陸軍寄りに 傾いていた

**「満州事変機密作戦日誌」**(参謀本部)
要スト云フ者、陸相ノ外、首相一人ニシテ、他ハ全員不要ナリトシ、問題ハ決セズシテ解散ス

●その日の夕方、「朝鮮軍独断越境」の電報
▽朝鮮軍司令官は「八字髭」の 林銑十郎中将

**「越境将軍」の勇名を馳せたが…**
高宮記者は、「この人ほど小心翼々、周りの目を気にする人はいない」 林は「出動命令を出したところ、副官が『まだ中央の命令が出ていない』と止めたが、『断の一字あるのみじゃ』と押し切った。白装束に身を固め、責任を問われたら割腹してお詫びする覚悟を決めていた」

▽実際は「独断越境命令」は 神田参謀
第39旅団は 40時間も 足止めになったまま
▽神田は「一刻も猶予できない」と
旅団に 満州への 前進命令を出し
林を 電話口に呼び出し 決断を迫った

領事、ポルトガル公使を歴任。30年衆院議員。左派社会党に属し、左右統一後は党外交部長、政策審議会外務部長

**鈴木 貫太郎**(すずき・かんたろう)
慶応3(1867)～昭和23(1948) 関宿藩代官の子として大阪生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、軍令部長。昭和4年侍従長。二・二六事件で襲撃され瀕死の重傷。枢密院副議長を経て19年議長。20年4月首相に就任し、聖断で戦争を終結させる

**木戸 幸一**(きど・こういち)
明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。木戸孝允の孫。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相を歴任し、15年内大臣。16年主戦論者の東条陸相を後継首相に推挙、戦争末期は反東条で終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固刑、30年仮出所。著に「木戸幸一日記」全3巻

**「木戸幸一日記」**(9月19日)
軍部の態度は中々強硬にして、閣議決定事項の実施については、出先軍部に方針不徹底の嫌いなきにあらずとて、憂慮懊悩の様子なり。何等か軍部統制の良策はなきや等との話あり
余はこの難局に際し、首相が之が解決につき所謂他力本願なるは面白からず、内閣は宜しく幾度にても、亦何日にても閣議を反復開催して、国論統一に努め、内閣自身確乎たる決心を示すの外に途なしと信ずと主張す

**林 銑十郎**(はやし・せんじゅうろう)
明治9(1876)～昭和20(1945) 石川県生まれ。陸軍大将。陸大校長、近衛師団長。昭和5年朝鮮軍司令官となり9年斎藤内閣陸相。岡田内閣にも留任し、12年首相に就任したが、わずか4ヵ月で総辞職

▽林は 震え上がったという
　神田が「建川も了解済み」と保証し やっと承認
▽それでも 不安だったのか 副官に
　「参謀本部に独断で出兵すると報告しておけ」
▽この電報に 怒ったのが 今村均大佐(作戦課長)
　「独断という以上、軍司令官の責任を以てやるべきで、只今より無断で兵を出しますなんて、こんな馬鹿な報告をする奴があるか。責任を中央に転嫁しようとする卑怯な手段で、絶対見過ごすことは出来ない」
▽国境の 新義州 安東県の 憲兵隊長に
　「越境を阻止せよ」と 打電したが
　第39旅団は 21日午後1時20分の列車を先頭に
　　続々と 鴨緑江を渡って行った 後だった
▽本庄軍司令官は 第2師団に進撃命令 吉林占領
　事変勃発4日間で
　吉林から南の 満鉄沿線は 日本軍の勢力下に

●一番の問題は、若槻首相だった
▽政府が 経費支出を認めなければ
　奉勅命令は出ない 朝鮮軍も引き返すしかない
▽「独断越境」こそは 参謀総長の
　「待機命令」に違反した「統帥権干犯」

**西園寺は、原田に指示した**

若槻に辞意があっても、この事件が全て片付くまでは、辞職を許してはいけない。陸軍大臣あるいは参謀総長が独断越境について上奏しても、陛下がこれをお許しになることは断じてならん。また、黙っておいでになることもいかん。一度考えておく、と保留しておかれて、後に何らかの処置をとることが必要だ。

▽適切な指示だったが 若槻は 腰砕けになっていた
▽陸軍首脳会議は 21日夜 強硬方針を決めた
　「統帥権干犯には当たらない」の 統一見解
　陸相の職を賭してでも 出兵経費を認めさせる
▽南陸相が 22日朝 勢い込んで 若槻を訪ねると
　「出たものは仕方ないのではないのか」
▽若槻は 参内して 経費支出を
　「本日の閣議で決定する予定でおります」

**陸軍刑法第37条**

司令官権限外ノ事ニ於テ、已ムコトヲ得サル理由ナクシテ擅ニ軍隊ヲ進退シタルトキハ、死刑又ハ無期若クハ七年以上ノ禁固ニ処ス

**今村　均**(いまむら・ひとし)
明治19(1886)～昭和43(1968)宮城県生まれ。陸軍大将。英国駐在、駐印度武官。昭和6年参謀本部作戦課長。太平洋戦争では第16軍司令官としてジャワ作戦を指揮。17年第8方面軍司令官となりガダルカナル撤退に努力した。戦犯となり、29年釈放後、庭の一隅に3畳ほど小屋を建てて寝起きし、謹慎生活を送った。著に「私記・一軍人六十年の哀歓」

**鈴木(陸軍大臣)は「統帥権干犯」と指摘**

南陸相は「根拠を示せ」と強談判。鈴木はこう説明した。「軍司令官の独断専行には二つの場合がある。一つは、基本的な命令のほかに、これから先は軍司令官が臨機応変、独断を以て処すべしと命令を受けている場合。もう一つは、突発事件が起きて、全責任を軍司令官が持って兵を動かした場合だ。林軍司令官の場合は後者だが、朝鮮軍が越境出兵するには当然勅命を奉じてやらねばならない。それなしにやったのだから、当然大権干犯になる。しかし将帥の任に当たる者が、大局から見てこうしなければならないと決心すれば、進んで名を求めず、退いて罪を避けず、身を投げうって、その責めに任ずべきでしょう。これが私の見解です」

**天皇には張作霖事件の反省**

田中義一首相は、天皇に約束した関係者の処罰が陸軍の反対で出来ず、天皇から「前と話が違う。辞表を出してはどうか」と叱責され、内閣総辞職

▽天皇は「止むを得ぬ」と 頷かれたが
「拡大しないという政府の趣旨徹底に努力せよ」
天皇の意思が「不拡大」だと 伝えた
金谷参謀総長にも「将来を慎め」
陸軍が勝手なことをするなと 注意された
▽朝鮮軍経費は 午後の閣議で
予備費から 出すことになり
満州事変は 政府の正式な承認を 受けた
▽南陸相が 閣議で「これ以上、
軍事行動に出ない」と 繰り返しながら
翌日には 事実が それを裏切っていった

**若槻は、嘆くことになる**

日本の軍隊が、日本の政府の命令に従わないという、奇怪な事態になった。

▽若槻は 回顧録で
「宇垣が陸軍大臣でいてくれたら、十分睨みを利かせたろうに、南はてんで物にならなかった」
▽若槻に「これで事変を終わらせる」
固い決意があれば 心を鬼にしても
越境経費は 認めるべきでは なかった
▽幣原外相は 戦後「もし経費支出を
認めていなかったら、軍事革命になったろう」
▽「三月事件」の噂は 若槻 幣原の耳に
心のどこかに 陸軍に対する怯えが…

●戦場が南満州である間は、まだ良かった
▽蒋介石は 地方軍閥の反乱 共産軍との戦闘で
「まず内を固め、外とは争わない」方針
9月21日 国際連盟に 提訴した
▽日本は 24日
「事件不拡大・軍隊漸次撤収」を 政府声明
▽国際連盟理事会は 30日 声明を評価し
「軍隊撤退を最短期間内に実現する、という
日本の声明を了承する」決議案を採択し閉会

**列国は、満州どころでなかった**

米国(国際連盟には未加入)はスティムソン国務長官が幣原外相に絶大な信頼を寄せ、「幣原こそ事件の円満可決の鍵を握る人だから彼を困らせるような手段は採るべきでない」しばらくは事



した。西園寺から「天皇の言葉が首相の進退を左右するのは良くない」
天皇は内閣の上奏には、たとえ反対の考えでも裁可することに。

**「満州事変」の呼称**

南陸相が21日の閣議で提案すると、「戦争でなく事変と言うのなら、陸軍も拡大しないで解決する積もり」と、閣僚は異議なく賛成した。
これには、政府に介入させず陸軍のやりいいようにやる、という魂胆が。戦争なら宣戦布告が必要。国家の意志決定として内閣が天皇に助言する輔弼事項になる。事変なら「軍事行動は政府の問題でなく、統帥事項だ」と陸軍の判断を優先できる。

**若槻の弁解**(古風庵回顧録から)

出兵しないうちならともかく、出兵した後にその経費を出さなければ、兵は一日も存在できない。食うものもないことになる。それならこれを引き揚げるとすれば、一個師団くらいの兵力で、満州軍(関東軍)が非常な冒険をしているので、殲滅されるようなことになるかもしれん…日本の居留民たちまで、ひどい目に遭うに違いない。そこで私は、閣員の賛否にかかわらず、すぐ参内して「政府は朝鮮軍派兵の経費を支弁する考えであります」と奏上した。

**政府声明**(9月24日)

この事件は、支那軍隊の襲撃に対する自衛権の発動によって起こったものであるから、これ以上、事態を拡大せしめないように努力すると共に、満鉄に対する脅威が除かれれば、わが出動部隊は、おおむね鉄道附近地帯に帰還するはずである。したがっ

態静観の態度だった。金本位制の本家本元・英国が、9月21日、金の輸出禁止に踏み切り、金本位制が崩れかけていたから、列国の関心は、辺境の満州ではなく、むしろ経済問題だった。
ソ連も、第1次5ヵ年計画がスタートしたばかり。経済再建に躍起になっている時だった。

●日本が、政府声明を守ってさえいれば、事態は収拾されるはずだった
▽石原中佐としては このまま 終わったのでは困る
北満州を占領して 将来の対ソ戦に備える
豊富な資源・産物を 日本のものにして
石原の謀略計画は 初めて 完成するのだ
▽ハルビン チチハルへ出る 口実が必要だったが
参謀総長は 天皇から「将来を慎め」
新たな軍事行動を 厳しく 制限していた
▽石原は 10月8日 独断で 錦州を爆撃した
本庄軍司令官は 何日も 眠れぬ夜を
昭和天皇も「自分の時代にも
大戦争になるのか」と 嘆かれた

●錦州爆撃は、国際連盟を硬化させた
▽25キロ爆弾 75発の被害は 軽いものだったが
民間人が巻き添えになり 英国資本の鉄道も
まず 英国政府が 厳重抗議してきた
▽スイムソンも 対日経済封鎖を 主張するように
▽連盟理事会は 24日「日本が直ちに
撤兵を開始し、11月16日までに完了させる」
決議案を 13対1 日本の反対だけで可決した
▽理事会決議は「全会一致」が原則
法的には 成立しなかったが
日本の「自衛戦争」の主張が
国際的には 全く 通用しないものに
▽張学良軍も 反撃に転じたため
北満州進撃の口実 11月19日 チチハル占領
事変2ヵ月で 東三省の 省政府所在地を掌握

●橋本中佐が「満州と国内同時にやろう」と言っていたクーデター計画も、具体化していた

て、今次の不祥事をして、国交の破壊に至らしめず、さらにすすんで禍根を将来に避けて、できるだけ建設的方針を講ずるため、誠意、中国政府と協力する覚悟である。

**スティムソン**(Henry Lewis Stimson)
1857～1950 昭和5年共和党フーバー政権で国務長官に就任。満州事変拡大に7年1月、「日本の不戦条約、九ヵ国条約違反による満州侵略は認められない」と、スティムソン・ドクトリンを発表した。日米開戦の時には陸軍長官

**錦州爆撃は幣原外交への爆弾**
中国本土に近い錦州には、張学良が政権を移し防備を固めていた。石原は「ちょっと偵察に行ってくる」散歩にでも行くような、スリッパ履きで、朝鮮軍から派遣されいた飛行機12機を引き連れ飛んで行った。
飛行機が帰って来ないうちに「錦州爆撃さる」の外電が、東京から奉天へ打ち返されできた。司令部が慌てふためいているところへ、石原は帰ってきて「ポンポン撃ってくるし、こっちもどこかに爆弾を落とさないと着陸する前に自爆するかも知れん。どうせならと、張学良の司令部に落としてやったんだ」

**「十月事件」の計画**
◆決行の時期 10月21日
◆参加兵力 将校約120名 兵は近衛、第1師団の歩兵10個中隊、機関銃2個中隊
◆攻撃目標(イ)首相官邸の閣議を急襲、首相以下を斬撃 (ロ)警視庁の占領(ハ)陸軍省、参謀本部を包囲、幹部に同調を強要する (ニ)報道、通信機関の占領(ホ)不良人物、将校の制裁
◆新内閣陣容 東郷元帥を参内させ、

▽10月21日 歩兵10個中隊 機関銃2個中隊で
首相官邸などを襲撃 テロのリストには
若槻首相 西園寺など 数百人を挙げ
青年将校に 理解を示している
荒木貞夫中将を首班とする 内閣を作る
▽連日連夜 料亭で豪遊し 全国の青年将校に檄
首相官邸の斬り込み隊長 長勇少佐は
クーデター資金で 赤坂の芸者を身請け
▽どうするか 陸軍首脳の話し合いでは
小磯(鞠躬)が「いっそ、やらせてみるか」
鎮圧するか 実行させるかも 首脳の胸三寸に
▽17日未明 憲兵隊が
首謀者12人を 一斉検挙したが
近郊の旅館や 料亭に 軟禁しただけ
▽処分も 橋本重謹慎25日 長20日と 軽いもの
▽クーデターの噂は 10月初めには 原田の耳に
洩らしたのは 鈴木貞一中佐(ｰﾀ会員)
真意は？「陸軍に余計な口出しをするな」
▽政界や 宮中関係者の間では
「陸軍に反対すると命が危ない」無言の圧力に

●傀儡国家「満州国」工作も、密かに進められていた
▽石原の計画では 満蒙を 日本領土にし
朝鮮 台湾のように 総督制にすること
▽「止め男」として やって来た 建川少将は
「それでは、とても中央は通らない」と反対

**「侵略戦争」の線引き**

日本は昭和3年8月27日、パリで「不戦条約」に調印している。第1次大戦の悲惨な経験から米英など有力15ヵ国が、「侵略のための戦争はしない」と誓ったもので、大正11年2月6日のワシントン会議では、中国の主権・領土尊重を約束した「九ヵ国条約」にも調印している。
「不戦条約」を結んだからといって、戦争がなくなるわけではないが、条約発効(昭和4年7月24日)前と後とでは、侵略戦争に対する国際的糾弾の重みがすっかり変わった。

▽張学良に代わる 親日政権作りに 路線転換
関東軍が 目をつけたのが 清朝最後の皇帝溥儀
荒木貞夫に大命降下を工作する。
閣僚予定名簿には荒木首相兼陸相、建川外相、橋本内相、長警視総監

**荒木　貞夫**(あらき・さだお)
明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。第1次大戦中、ロシア従軍武官を務め陸軍内のロシア通として知られる。憲兵司令官、陸大校長、第6師団長などを経て昭和6年犬養内閣陸相。精神主義的、反共主義的言動が、青年将校や右翼から期待され、皇道派の中心に。二・二六事件で予備役になり、近衛内閣文相。A級戦犯で終身禁固刑。29年釈放

**長　勇**(ちょう・いさむ)
明治28(1895)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍中将。昭和5年桜会結成以来、急進派の中心人物で「十月事件」では警視総監候補。19年第32軍参謀長となり、沖縄戦で20年6月摩文仁の洞窟で自決

**鈴木　貞一**(すずき・ていいち)
明治21(1888)～平成1(1989) 千葉県生まれ。陸軍中将。大正9年以来、参謀本部で中国問題を担当。北京・上海駐在を経て、若手将校で「木曜会」を結成、満蒙積極策を唱えた。昭和16年から近衛・東条内閣で企画院総裁として戦争経済企画の中心に。A級戦犯で終身刑。31年釈放

**溥儀**(ふぎ)
1906～1967 清朝第12代、最後の皇帝宣統帝。辛亥革命により退位。昭和7年、軍部に擁せられ満州国執政、9年皇帝となる。敗戦でソ連に逮捕され、東京裁判には証人として出廷した。25年中国・撫順戦犯管理所に移され、34年特赦。39年政治協商全国委員。著に「わが半生」

**溥儀は満州国皇帝に**

土肥原賢二大佐（奉天特務機関長）は11月9日、溥儀連れ出しに天津に潜入した。溥儀は、真っ先に聞いたという。「新しい国家は帝政か共和制か」「勿論帝政です」に満州行きを決意、翌日の夜、雨まじりの強風の中を脱出し、旅順に入った。

昭和7年3月1日、満州国建国で執政に就任し、9年3月1日の帝政実施で皇帝となる。

●内憂外患、若槻は「挙国一致内閣」で乗り切ろうと

▽政友会との 連立内閣にすれば
　国民の意思を 代表した内閣になる
　軍隊も 政府の命令を 聞くようになるだろう

▽連立を主張していた 安達謙三内相に
　連立工作を 依頼したが
　政友会と組むことは 民政党の政策
　　中国外交 金本位制の 180度転換を意味する

▽幣原外相 井上準之助蔵相に 猛反対され
　若槻が 断念したものだから
　　怒ったのは ハシゴを外された安達

▽病気と称して 閣議を欠席
　辞表提出を求められても 応じない

▽若槻内閣は 12月11日 「閣内不統一」で総辞職
　「破船を引きずり座礁 短命な無力内閣」（東京朝日）

▽天皇は 西園寺に 異例な注文を つけられた
　「ファッショのような者は、絶対にいけない。
　　軍部の統制、国際協調に心がけるよう、
　　お前から十分含ましてほしい」

▽後継は 政友会・犬養毅内閣（12月13日成立）

●戦前の日本を振り回した石原莞爾とは…

▽戦後の22年5月 酒田（山形県）の東京裁判臨時法廷に
　石原は 古ぼけたオーバー よれよれの戦闘帽
　　膀胱ガンで リヤカー乗せられ 出廷した

▽尋問した 米人検事に
　「今度の戦争の戦犯第1号は、
　　広島に原爆を落としたトルーマン大統領だ」

▽昂然とした姿勢は 死ぬまで 崩さなかった
　中でも 徹底していたのが 東条英機に対して

**「金本位制」をどうするか**

昭和大恐慌の最中、若槻内閣は金の輸出という国内問題でも揺さ振られていた。英国が金輸出を禁止した時、日本も再び禁止すべきだったのだろう。ポンドが2割ほど下落し安くなった英国製品がどっと中国に流れ込んだ。「日本製品は買わない、売らない、使わない」と、排日運動が激しくなっている中国。メリヤスなど、日本の輸出は大打撃を受けた。

そこへドルの思惑買いが重なり、財閥系の銀行、商社が、一斉に円をドルに換えた。金輸出禁止で円が下がり、ドルが上がった時に円を買い戻せば大儲けできる。金を解禁した昭和5年1月、10億6千万円もあった日銀の正貨が、半分以下の4億5千万円に。ドル買いの凄まじさを物語っている。

井上準之助蔵相は、日銀の金利を二度上げてドル買い筋を資金面で抑えようとしたが、流れは変わらず、しかも金利引き上げは不景気を一層ひどくした。

11月2日には、社会党青年同盟の100人が三井銀行本店を襲撃、「ドル買い財閥を倒せ」と気勢を挙げた。右翼も民政党攻撃の怪文書をばら撒いた。

**井上　準之助**（いのうえ・じゅんのすけ）

明治2（1869）～昭和7（1932）大分県生まれ。日銀総裁、蔵相歴任。昭和4年浜口内閣蔵相となり金解禁を断行。第2次若槻内閣にも留任。血盟団に狙撃され死亡

**安達　謙蔵**（あだち・けんぞう）

元治1（1864）～昭和23（1948）熊本県生まれ。明治35年衆院議員（当選14回）。昭和2年民政党結成に参加。若槻・浜口内閣で逓信相、内相。7年脱党し国民同盟総裁

▽満州事変が 東京裁判で
「平和に対する罪」で 糾弾されながら
石原は 戦犯にもならず 責任も問われてない
「反東条」の実績が 評価されたのか

**独特の文明史論「世界最終戦論」**

熱心な日蓮宗信者だった石原は、日蓮の予言した「前代未聞の大闘諍（とうじょう=戦争）」は日米戦争だ。日本が東洋文明、米国が西洋文明の覇者となり、最終兵器による最終決戦が、日米間で行なわれる。その時期は、飛行機が無着陸で世界一周をする時だ。石原にとって満州事変は、最終戦争に勝つための満蒙領有、開発だった。

昭和12年に支那事変が始まった時、作戦部長の石原が拡大に反対したのも、「今はまず満州を固めて、来るべき対ソ戦、対米戦に備えるべきだ」との考えからだった。

**石原、戦後の反省**

民族協和の理想は、日中両国の和解がなくては不可能だ。満州国を建設するにも、それが根本条件になる。しかし満州国は、日本独占の方向に急変してしまった。

●満州事変勝利は、陸軍の発言力を圧倒的に強くした
▽陸軍が「統帥権」を盾に
国家の意志も 外交も押し退けて
出てくるのは 満州事変からだった
▽独断専行しても「結果良ければ全て良し」
参謀たちの間に 一種の「石原現象」
▽石原自身 中国への 露骨な介入に
ストップをかけようとして 部下から
「石原さん、あなたが満州でやったのと
同じ事をやっているに過ぎませんよ」
▽陸軍下剋上の風潮を
ますます 強くしてしまった
石原「満州事変謀略」の罪は 大きかったのでは

**犬養　毅**（いぬかい・つよし）

安政2（1855）～昭和7（1932）岡山県生まれ。号は木堂。第1回総選挙以来、連続当選18回。護憲・普通選挙運動を推進、「憲政の神様」と称された。大正14年政界引退を表明したが、昭和4年政友会総裁となり、6年首相就任。五・一五事件で暗殺

**東条を軽蔑し、嫌っていたか**

関東軍参謀副長時代、東条参謀長が「用事があるから部屋まで来てくれ」と使いを寄越すと、「こちらには用がないから、行かないと言ってくれ」

第16師団長時代、京都大学の講演で「敵は中国人ではない。東条こそ銃殺されるべきだ」と言って、聞いていた京都府知事を真っ青にさせたとか。

人前で東条のことを「上等兵」「高等小使」と呼ぶのはしょっ中。関東軍に石原を訪ねた人が、用件が終わり、東条の部屋を尋ねると、「東条上等兵の部屋は、この上だ」廊下中に、響き渡るような大声で怒鳴ったという。

戦後、東条との対立を聞かれた石原は「対立なんかなかった。僕には思想があるが、東条には思想がない。思想のない者が、どうして、思想のある者と対立できるか」

**青年将校時代から陸軍の異端児**

仙台幼年学校は首席で卒業したが、陸士は6番。「性粗野にして無頓着」の操行点で損をしたという。陸大でも、頭の冴えは陸大始まって以来と言われながら2番。首席だと陛下の前で御前講演をする。ズーズー弁では困る、あの行儀作法では何をするか分からんから、2番にしたんだとか。

青年将校の頃から学術優秀、品行方正の優等生タイプではなかった。